

# 伊勢物語 六段 「芥川」

おかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ河を率ていきければ、草の上におきたりける露を、「かれは何ぞ」となんおとこに問ひける。ゆくさき多く夜もふけにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥におし入れて、おとこ、弓やなぐひを負ひて戸口に居り、はや夜も明けなんと思つつみたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴るさわぎにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉かなにぞと人の問ひし時露とこたへて消えなましものを

これは、二条の後のいとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてみたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひて出でたりけるを、御兄人堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下らうにて内へまいりたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへしたまうてけり。それを、かく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて、後のただにおはしける時とや。

# 伊勢物語 六段 「芥川」 \*現代語訳\*

昔、男がいた。

とても手のとどかない女性を、長年も経て求婚しつづけてきたが、やっとのことで、盗み出して、とても暗い中、逃げてきた。

芥川という河のほとりを（女を）連れて行くと、草の上に置いている露を、「あれは何ですか？」と（女が）男に尋ねた。

行く先は遠く、夜もふけてしまったので、鬼の居るところとも知らないで、加えて雷までもとても激しく鳴り、雨もたいそう降ってきたので、荒れ果てた蔵に、女を奥の方へ押し入れて、男は弓とやぐないを背負って、戸口に居た。早く夜が明けてほしいなあと思ひながら立っていたところ、鬼は早くも（女を）一口に食べてしまった。

（女は）「あれえ」と悲鳴を上げたけれど、雷の音のために、（男は）聞くことができなかった。

だんだんと夜が明けてゆくので、（男が蔵を）見ると、連れてきた女はいない。

地団太を踏み泣いたけれども、もうどうにもならない。

白玉ですか、何ですか、とあの人が尋ねた時に、「露ですよ」と答えて（露のようにはかなく）消えてしまえばよかったのに。

これは、二条の后が、いとこにあたる女御のお側にお仕え申し上げるような風にしていらっしやっただが、容貌がとても美しくいらっしやっただので、（男が）盗み、背負って逃げ出したのを、（二条の后の）兄君の堀川の大臣と、太郎国経の大納言が、まだ身分の低い頃であったが、宮中に参上される時に、ひどく泣く人があるのを聞きつけて、車をとめて（二条の后を）取り返されたのであった。それを、このように鬼というのであった。

（この話は二条の后が）まだたいそう若くて、臣下の身分でいらっしやっただけのことであるとかいうことである。